

＜書 評＞

松村 秩 著（東京コロニー）

ねたきり老人の介助

自立のための手だすけ

二木 立（代々木病院）

この数年、寝たきり老人問題が社会的に大きな注目を集めている。

そんな折に発行された本書は、この問題に早くから取り組んできた著者が、10年間の経験をまとめて、寝たきり老人の介護技術を体系化したものであり、時宜にかなっている。

著者は「寝たきり老人のリハビリテーションは、手足の機能訓練が中心となるのではなくて、日常生活そのものがリハビリテーションとならなければならない」と明快に述べている。このような視点から、著者は人的介助の技術を、自立のための介護法と機能訓練に峻別した上で、前者に重点を置くとともに、後者は

機能維持訓練に限定している。従来、病院のリハビリテーションの“焼き直し”的で、PT,OT 以外には実行が難しい機能回復訓練偏重の類書が多かったことを考えると、著者の視点・方法は新鮮ですらある。

しかも、各介助法・訓練法は、豊富な写真、詳しい「手順」の説明、“ダメ押し”的な「留意点」により、誰にも分るようになっている。

更に、終章では「介助者のための（夕）腰痛予防法」を詳細に述べており、著者の蘊蓄の深さがうかがわれる。

他面、本書では、寝たきりの原因として、運動不足による廃用症候群

が強調される余り、痴呆等の精神症状や心疾患等の全身疾患の説明が不足している。しかし、これらの有無、程度は、在宅での介助・訓練のプログラム、ゴールに少なからぬ影響を与えるのではなかろうか。

更に、本書では、各動作が全介助、半介助、自立の3段階に分けられ、監視の段階が抜けている。しかし、痴呆やバランス障害を持つ老人では、個々の動作は「自立」していても、日常生活では、要監視のことが少なくない。転倒、骨折等の事故を予防するためにも「監視」の重要性については、是非触れて欲しかった。

ともあれ、本書は、地に足のついた手引書であり、寝たきり老人に限らず、重要身体障害者の医療・リハビリテーションに携わるすべての人に、一読をすすめたい

（B 5，頁118，1982，¥1,250，医歯薬出版 刊）